

# 「記念植樹」と近代日本 -林学者本多静六の思想と事績を手掛かりに-

## 1 研究の目的

本研究は、主に公式の場面で実施された「記念植樹」、即ち「記念に樹を植える」という行為を、近代日本の発展過程の中に位置づけて、そのバックグラウンドとなる歴史事象と照合しながら、その文化的な行為の有様を分析することにより、それが行われた意図とその根底にある自然観を解明することを目的とする。本稿では東京帝国大学教授本多静六の事績に焦点を当て、林学者本多が理念とするところの記念物に見られる形態と思想を検証する。何故なら同時代において記念事業の一環として営まれた記念植栽に係る方法論を構築し、それを奨励したのが本多を中心とする林学・林政の指導者にあると考えられるからである。本多の思想と事績を論ずることは、即ち近代日本における「記念植樹」を論ずることにも通じる。言い換えれば本研究は記念植樹という行為を通して、本多静六という一林学者の人物像とその思想を論ずるものであり、本多と記念植樹という二者を介して、「樹木を植える」という近代日本の人間文化を探究するものである。

## 2 なぜ記念植樹か

何故「記念植樹」を取り上げるのか。それは今日において公私を問わずあらゆる場面で一般的となった記念植樹という行為が、実は近代国家が形成されてゆくプロセスにおいて、権力の可視化を目的に、例えば近代彫刻家大熊氏広らが製作した記念像や記念碑が数多く設置されていく傍らで、同じように時局に合わせて形を変えられながら、近代化の一牽引役としての役割を背負わされていたのではないかと推測され得るからである。形を変えられ、と書いたのは、今日の我々がイメージするであろう記念植樹、つまりスコップを片手に一本の苗木に厳かに土をふる、といった儀式的な植樹法のみならず、意外にも成長した大木を移植する方法を用いる記念並木(列上植栽)や記念林(集合体)といった実践的な造林計画もまた、嘗ては林学者や造園学者らによって記念植樹に分類され、奨励されていたことを意味する。即ち、用途に合わせていずれかが選択され、あるいは組み合わせられ、記念事業の一環として実施されていたと考えられるのである。

この仮説を裏付けるものとしては次の二つ根拠がある。第一にそれは記念植樹を奨励するテキストの存在であり、第二に記念植樹という行為を特化し、それにニュース価値を認めていた報道機関の存在である。前者については、明治から大正、昭和にかけて、本多静六や農商務省など林学や林政の指導者が記念植樹を推進するテキストを多数発行していたという学問的状況がある。学問の場からは、何故に記念事業として記念植樹が最適かという理念、およびそれを如何にして行なうかという方法論が啓発普及されたことにより、社会に認知される行為となり得た。後者については、「記念植樹」がニュースとして逐一報じられ、批判的というよりは寧ろ好意的に、内外の社会に宣伝され人々の広く知るところとなった。そのプロセスにおいて、第二次大戦中、新聞社が自ら主体となって記念の献木運動を起こしたことは、報道機関自身が記念に木を植えるという行為に価値を見出していたことの証左となった。この二つの状況こそ、近代日本社会に記念植樹という行為を根付かせる基盤となり、その相乗効果によって、各時代の記念事業に合わせて記念植樹活動が展開してゆくのである。

## 3 本研究の論点

本研究の論点は、第一に樹木を植えるという行為における「実践性」と「儀式的性」の考察、第二に林学者本多静六の再評価にある。第一の論点については、記念植樹という行為を「植樹」という部分に限った見方をすると、一つの実践的な緑化事業として捉えるか、あるいは儀式的・思想的行為として扱うか、という二つの異なる視点からのアプローチが可能となる。ここでいう「実践性」とは、国づくりや山づくりに係る殖産性や風致性に値し、「儀式的性」とは記念碑性を意味する。実際に当時計画された記念樹植栽や記念林、記念並木の姿を分析すると、「実践的要素」と「儀式的要素」は分離しておらず、殖産性や風致性に基づくインフラ整備としての実用的な緑

化事業と、記念碑性を主とする儀式的・思想的な植樹式という行為が単独で、あるいは組み合わせられて実施されるケースが見受けられる。換言すれば近代日本の国づくりにあたり、儀式としての記念樹植栽と実践事業としての植樹活動の両者を以て発展する傾向が見られる故に、「記念」に「植樹」という行為を研究するには、「儀式」と「実践」の両面を問う姿勢が必要となるのである。

これらを踏まえた上で植樹に関する研究を参照すると、実学の範囲では工学や農学における緑化政策としての側面から論ずるものがある。しかし、当然のことながら実学の分野では何故に「記念」に樹木を植えるのか、というような思想的な観点から「植樹」の記念碑性が論ぜられることは稀である。人文学の範囲では、就中、昭和戦中期の「桜」の植樹に関する政治思想的な側面を指摘するものがある。だが、それが戦前、戦後と変わらず連続と行われている理由、およびそれを支える自然思想については論じられてこなかった。このような先学に対し、本研究が目指すところは、国民国家形成期に推進された記念植樹という行為の中に、「実践性」と「儀式性」という関係を見て取り、それが戦前戦後という近代社会の発展過程において如何に構築され、どのように機能していたかを考究することにある。

しかしながら、上記の実学および人文学のいずれにせよ共通して言えるのが、近代造林学を築いた林学博士、且つ経済学博士の本多静六の姿が十分に解明されていない点である。というのも、同時代に営まれた御聖徳記念や帝都復興記念をはじめ、数々の記念事業で記念樹植栽や記念並木、記念林の造成を提唱し続けたのが本多を中心とする林学指導者であり、その本多の人物像と思想を中心に据えて検証しない限り、明確にならない検討課題は少なくないのである。この第二の論点である本多静六に関する研究については、造林学や造園学の中に位置づけられるか、あるいは経済学博士で資産家という肩書から一般向ビジネス書等で取上げられることが通例であり、本多という一人の人物を対象を絞った総合的な学術論文は未だ書かれていないのが現状であった。本多に論及した造園学や歴史学の研究論文においても同様に、本多の根本思想までには十分に触れられていなかった。そこで本研究では、近代日本において国家的行事に発展する記念植樹という文化的な行為について、その牽引役となった本多静六の人物像を再検討することを課題として、本多の説く記念植樹の理念を抽出するとともに、時代毎の社会的背景と照合しながら、その方法論の支柱にあると見られる自然観を導き出すことを試みた。この点については筆者の修士論文『記念植樹の文化史的研究 ―山岳信仰から緑化活動に至る思想と形態の変遷―』において十分に踏み込めなかった論点であり、本稿では修士論文で取り上げた対象事例を、本多の生涯に合わせて更に昭和戦中期まで拡大して考察を進めた。研究上のスタンスとしては、近代的社会構造における記念植樹の位置づけを俯瞰し、思想的に偏らない視点でその活動の大枠を捉えることを一つの目標とする。

以上のように、植樹に関する実学的ならびに人文学的研究を参考に、実用的な緑化事業としての植樹に注目するとともに、「何故に記念に木を植えるのか」という心の側面、即ち儀式的に念ずる、あるいは祈るという感性的な側面にも着目して検討を行った。この手続きを踏まえた上で、近代化が促進される当時の日本で為された、「記念植樹」という一つの人間文化の有り様についての解明を目指すものとした。

#### 4 本文の構成 - 近代日本における記念植樹の系譜 -

本文の構成は大きく分けて三つの部分からなる。第一部ではまず記念植樹を「念じて樹を植える行為」と定義した上で、農商務省山林局や本多が執筆したテキストから記念植樹の三形態（記念樹・記念並木・記念林）を概観し、記念植樹に関する報道記事から同時代社会における記念植樹の位置づけを分析したのち、近代国家の形成と記念物の関係について論及する（第一章）。次に記念植樹の由来を紐解く目的で、古代の神話や和歌、山の信仰に係る「木産み」や「鳥総立」等の杣人の風習から植樹に関する諸相を振り返り、古来の植樹や植林における「儀式性」と「実践性」について検討した。この手続きにより、何か特別なことを機縁として、「念じて植える」という行為が古くより続く文化であることが明らかとなった（第二章）。

第二部では本多の人物像とその思想の源流について考える。まず本多の歩みと主な事績の概略を述べ（第一章）、次に彼の思想形成を分析する為に、幼年から学生時代に享受した教育に注目する。前者では、本多に関する研究でもそれまで本格的に取上げられることの少なかった生家折原家に纏わる富士山信仰「不二道」に焦点を当てる。

不二道とは、戦国時代の長谷川角行、近世の行者食行身禄に由来する富士講の一派で、江戸後期に埼玉県鳩ヶ谷の小谷三志（1765-1841）が組織した講社を指す。小谷三志の古参高弟にあたる本多の祖父折原友右衛門は、富士登山67度の大先達であり、実は神道国教化の時流に対峙して不二道本来の教義を遵守し、「不二道孝心講」という組織を立ち上げたという側面もある。その不二道の教義とは、山をご神体と仰ぐ信仰をベースとして、自然界における陰陽男女の和合とその子孫繁栄を尊重する。講の活動形態は、富士登拝を主軸に、家業出精、儉約勤勉などの実践道徳を重んじ、社会奉仕として「土持」と呼ばれる土木作業等、個々の天分に見合った「行」を執り行い、そこから得られた「余徳」を相互扶助として分け与えることを信条とした。本章では特に不二道に献身した祖父の人物像や小谷三志の説く実践道徳や自然思想に触れ、本多の思想形成に与えたであろう諸影響について考察した。なお、不二道を研究する過程で、本多の信仰を明らかにする文書を発見したことは、本稿における第一のアピール点としたい（第二章）。次いで東京山林学校および国家経済学としての林学を学んだドイツ留学時代を挙げ、当時の林政と林学の関係を検討するとともに、本多の西洋思想の受容と展開について言及した（第三章）。

本多の人物像とその思想形成を踏まえたところで、実際に本多が勧奨した記念植樹の功徳と方法論に着目する。山の信仰を身に付けた本多の説く記念植樹とは、老樹名木を手本に子々孫々と「いのち」を繁栄させるが如く、「生きたる記念碑」を植えることであり、樹木を愛する心を礎に、一人一本の植栽が森をつくり、個人の徳が社会の徳になるという功利的内容を有するが、その理念と方法論が宗教者を含め、同時代社会に広く普及していたことが確認された。山岳信仰といえば、密教に由来する高野山金剛峯寺や京都醍醐寺では、記念植樹という行為が儀式として、また山づくりという実践事業として実施されているが、役行者（神変大菩薩）や弘法大師空海、理源大師聖宝などはいずれも「念ずる」という加持祈祷によって、国家安穩、五穀豊穰、子孫繁栄を祈願する宗教者であったと同時に、山水を治めた実践家であったと伝えられる。そもそも山岳信仰というのは「実修実証」を理念として、社会とのつながりを「祈りと実践」を以て具現化することを目的とする宗教といわれる。この思想に照らし合わせてみると、本多もまた「祈り」と「実践」を以て、植樹事業に取り組んだ林学者に位置づけられよう（第四章）。以上から、近代文明の導入に積極的だった本多が推奨した記念植樹という行為は、必ずしも西洋志向、近代科学主義に偏るものではなく、前近代的な思想と形態が融和した所に行なわれる活動であることが判明した。

そして第三部では『「記念植樹」の近代日本』と題して、近代日本社会における記念植樹の展開について分析する。具体的には明治中盤から昭和戦中期にかけて主に本多が関与した記念事業を事例に、本多の記念植樹に係る理念と方法論の発展過程を論証していく。対象としては年代順に、学校樹栽事業（第一章）、御聖徳・御大典記念事業（第二章）、第一次大戦終了期の平和記念事業（第三章）、帝都復興に係る都市美運動（第四章）、昭和戦中期の皇紀二千六百年記念事業や大多摩川愛櫻会の事業等（第五章）を取り上げ、本多の言説を拠所にその活動の根幹にあると見られる自然観について考察する。

その変遷を辿ると、明治中期に文部次官牧野伸顕が導入した学校樹栽事業は、学校基本財産構築という殖産が目的であったが、本多は従来の労働を主とする植林に「修学の記念」やアルピニズム等、レクリエーションの要素を加え、楽しみを主とする持続可能な方法論を説いた。

御聖徳記念の明治神宮の森づくりでは、葬場殿址の一本の記念樹から、記念行道樹の植栽、御大典記念植林による街づくりを伴う実践的な植樹活動が奨励されたが、同事業において本多が記念に捧げたのが不二道の奉仕の記憶であった。それは不二道孝心講の「折原静六」として献木を行なった所に顕現していた。重要な点は、明治神宮造営局参与という役人「本多静六」として国民に植樹を奨励するだけではなく、自らも国民の一人として事業に参加したことだが、ここに記念植樹という活動の民衆性、また不二道の相互扶助の精神がうかがえる。

第一次世界大戦の終了を以て、世界平和の実現を奉祝する「平和記念植樹」が展開する。活動を支えたのは本多を会長とする帝国森林会である。本多の運営方針は、無駄を省き余徳を増やすという「本多式」にあるが、ここでいう無駄とは「いのち」を無下にしないということで、あらゆるものを「活かす」、あるいは「全うさせる」ことを本望とするところにある。平和記念東京博覧会に出品された帝国森林会の「ご神木」は、見た目は注連縄

が張られた古来のご神木、中身は最新の森林業を映し出す映写機であった。その心は、山の神々に対する尊崇の念があって、はじめて森林業という合理的な事業が成り立つということであり、それはまた自然への敬心を忘れるなどという近代社会に対する警告ともとれる作品であった。

続く帝都復興に係る都市美運動においても、犠牲者を慰霊する祈りの植樹式と、防災や風致に係る都市緑化という実践的なインフラ整備が併せて促進される道筋が解明された。そもそも都市美運動とは欧米において「緑を植え育むこと」を理念として、市民運動的に開始されたものである。しかし日本の場合には、「樹魂祭」と呼び習わす植樹祭や、その源流にある「水神祭」を例として、樹木を神の憑代とみなす自然信仰が備わるものであり、「祈り」や「祭事」が都市美の活動の支柱にあったことは諸外国の例に見ないところであった。都市美の指導者たちは建造物の表面的な「形」の規制はもとより、日本人の「心」の問題を重視し、謂わば、「都市美運動を土着化」させることによって日本の都市美を構築しようとしたといえる。また、史料を精査するプロセスにおいて、都市美運動の植樹における儀式性を裏付ける「明治神宮献木奉告祭」の祝詞を見出したことは、本稿における第二のアピール点としたい。

そして、昭和戦中期の皇紀二千六百年記念においては、国民の赤誠に基づく奉獻樹に対して宮城外苑の楠木正成の傍らで献木式が奉じられるとともに、「一億記念樹」として国民総動員の実践的植樹事業が推進された。同時期には世界平和の実現を目指して花々や樹木を介した国際親善も図られたが、戦争末期には防空、迷彩の「シェルター」としての緑地化政策が進められるとともに、忠魂の記念樹が捧げられる様子が見て取れた。しかしながら忠魂の記念樹は「桜」に限定されるものではなかった。自宅の庭に育つ「桜」を選んだ哀悼の記念植樹は、息子を思う素朴な母の心の現れであった。桜は神仏習合的な要素を備えた霊木として扱われるが、この母は息子の魂が宿るようにと、幼い頃より親しんできた樹木を忠魂の記念樹に選んだのである。ここで思い出される和歌がある。「我妹子が植ゑし梅の木見ると心にむせつつ涙し流る」（453 万葉集・巻3）という大伴旅人の挽歌である。亡き妻が植栽した梅の木にその面影を重ね合わせて涙に暮れる旅人の姿は、賀茂真淵の言葉をかりれば、「まことの心」の現れといえるものであった。自然物の「いのち」を尊び、神に祈り、仏を念ずる姿は日本の文化といえようが、忠魂の原点とはこうした母の心にあると思われる。

しかし、どんなに戦火が激しくなろうとも、樹木や花々の「いのち」を尊び、それを植え育む行為が「一億記念樹」や「植樹奉公」というフレーズのもとで、国土の美化に、保健に、砂防に、防潮に、防火に、防空に、擬装に、遮蔽に、迷彩に、「大いに樹木を植ゑよ」と叫ばれ続けたことは、銃後の植樹運動の展開にも少なからず影響を与えたものと思われる。何故なら敗戦後、焦土と化した市街地や荒れた山野に人々は心を痛み、虚脱を乗り越え、希望を持って再び木を植え始めるからである。焼け野原を前に、山を思い、緑を育むという「愛樹の心」は、戦火に燃え尽きることなく堪えきったのである。

## 5 結論

総じて戦前、戦中を通して展開した記念植樹という活動は、記念事業のテーマや目的に合せて、儀式としての記念樹植栽式と、実践としての記念並木や記念林の植林という形態が、単独で、あるいは複合して実施されるものであった。記念植樹の理念と方法論は、各時代社会の環境に樹木を根付かせることを第一義として、漸次研究が重ねられてきたのである。ここで第三部を振り返って頂きたい。そのタイトルを筆者が『「記念植樹」の近代日本』と題したのは、近代日本とはまさに「記念植樹」によって出来上がったのではないかと考えたところによる。「記念事業には記念植樹を置いてほかにはない」と結論付けた本多の事績の如く、記念植樹という行為は時代毎の社会的背景や思想のもとで展開し、様々に変容しながら営まれてきたことがこれまでの記述で明らかになった。そしてそれは時として「負の記念樹」になることさえあった。記念像や記念碑が政治的事情により破壊されたり場所を移されたりすることがある。長崎公園のグラント将軍ゆかりの記念樹も、第二次大戦中には敵国の植えた樹木として初代の記念樹は伐採されたと伝わるが、このように記念物というのは時に左右される一面があることも忘れてはならない。だが、心を込めて「念じて木を植える」という記念植樹という行為が有する、自然物の「いのち」を尊ぶという根本的な姿勢に違いはない。このことは、GHQ でさえ戦前の植樹活動と変わると

ころのない戦後の植樹活動の推進に積極的であったことが、それを物語る。

なにかの記念に植えた一本の樹木を大事に育てることは、森を愛する心を育てることに結びつく。禽獣も草木も皆一体となって、その「いのち」を生き生きと活かしあう。そこには子々孫々と「いのち」の営みを寿ぐ心がある。仮名乞兒論で「いのち」を「壽」と表記した空海や（『三教指帰』）、「死んで生れてまた死んで、かかるめでたい御誕生」という小谷三志の生死観がここに生きている。産湯につかる盥から最期の棺まで、人生において人が樹木の恩恵に与らないことはない。さればこそ、記念に木をお植えなさい、と本多は唱え続けたのである。

以上のように、「愛樹心」、「愛林」という自然物の「いのち」を敬い、その繁栄を願う自然観が支えとなっていたからこそ、「記念植樹」という行為に真価が認められ、緑を植え育むという行為が国民行事として、あるいは一つの日本の文化と呼ぶに相応しいまでに発展し、今に継承されていると考えられるのである。

## 目次

### 序章

1. 本研究の目的
2. なぜ記念植樹か ―テキストと報道による社会への普及・啓発―
3. 先行研究の現状
4. 本論文の概要

### 第一部 「記念植樹」とはなにか ―形態と歴史的諸相―

#### 第一章 記念植樹の形態

1. 「記念」に樹を植えるという行為
2. 記念植樹の形態 ―記念樹・記念並木・記念林―

#### 第二章 記念植樹をめぐる歴史的諸相

1. 前近代における記念樹の文化史
2. 古典からよむ記念植樹 ―記念植樹における儀式性と実践性の由来―
3. 霊木信仰と神仏習合
4. 語り継がれる「いのち」の記念樹

### 第二部 林学者本多静六の思想の根源 ―記念植樹の功德―

#### 第一章 本多静六の事績

#### 第二章 富士山信仰の歴史とその思想の享受 ―本多静六の思想形成1 幼年時代―

1. 折原家の由緒と家訓「不二道」
2. 近世富士山信仰史とその思想
3. 小谷三志の不二道の思想
4. 近代社会への移行期における不二道の変遷
5. 至誠報国不二道孝心講の思想と実践
6. 本多静六と不二道の思想

#### 第三章 明治時代の林学と林政 ―本多静六の思想形成2 学生時代―

1. 東京山林学校と明治の林政
2. ドイツにおける林学の思想 ―「森づくりは科学であり藝術である」―

3. ドイツ留学ターラントの記念1 ―記念種子交換と不二道の恩―
4. ドイツ留学ターラントの記念2 ―「大修学旅行」―
5. ドクトル本多静六の誕生 ―ブレンターノ博士の実践林学―

#### 第四章 本多造林学における記念植樹の方法と理念

1. 諸外国における樹木に関する本多の見聞
2. テクストから読む記念植樹の空間と思想 ―記念樹・記念並木・記念林―
3. 「植樹デーと植樹の功德」にみる本多の人生哲学
4. 本多静六に対する宗教者の理解 ―宗教と記念植樹―
5. 本多静六の記念植樹にみる思想的形態的特徴 ―生きたる記念碑―

### 第三部「記念植樹」の近代日本 ―明治～大正～昭和の系譜―

#### 第一章 学校教育と記念植樹

1. 学校樹栽とはなにか ―今日状況から―
2. 明治期の日本における学校樹栽の普及とその展開
3. 本多静六『学校樹栽 造林法』にみる理念と方法
4. 明治日本で何故学校樹栽が栄えたか

#### 第二章 御聖徳と記念植樹 ―明治から大正へ―

1. 御聖徳記念と明治神宮
2. 明治神宮造営における葬場殿址の記念樹
3. 御聖徳記念と即位の御大礼記念
4. 明治神宮の森づくり
5. 明治神宮と不二道孝心講の記念 ―折原静六として―

#### 第三章 平和と記念植樹 ―第一次大戦後の帝国森林会を主体に―

1. 帝国森林会の発足 ―大日本山林会とともに―
2. 帝国森林会の歴史的変遷と本多静六の位置
3. 平和記念植樹の理念と方法 ―第一次世界大戦の終結を機に―
4. 帝国森林会における記念林の運営
5. 平和記念東京博覧会と帝国森林会の記念樹
6. 平和と記念植樹 ―いのちの寿ぎ―

#### 第四章 帝都復興と記念植樹 ―大正から昭和へ―

1. 帝都復興期における都市美運動
2. 都市美運動の理念と源流 ―緑を育む―
3. 「大東京」の誕生 ―愛市の思想と都市美の実現―
4. 都市美と記念植樹 ―都市美運動における「緑」という思想と形態―
5. 都市美協会の「植樹デー」にみる実用性と儀式性
6. 土着化した都市美運動と樹木の「いのち」

#### 第五章「大記念植樹」の時代 ―昭和戦中期の時局を基軸に―

1. 皇紀二千六百年記念事業における植樹活動

2. 「大多摩川愛櫻会」の記念植樹 ー田園調布の櫻ー
3. 国際親善と記念植樹
4. 日本の戦時統制下における記念植樹 ー機能性と精神性ー

## 終章 記念植樹と日本人 ーひとはなぜ樹を植えるのかー

1. 記念植樹の心と形
2. 山の信仰と本多静六の記念植樹
3. 近代日本における記念植樹の系譜
4. 「荒れた国土に緑の晴れ着」 ー生き残った愛樹心ー